

北海道利尻島でエゾノヨモギギクを食べるツツミノガ2種の記録

楠 祐一¹⁾・佐藤雅彦²⁾

¹⁾ 〒 078-8321 北海道旭川市神楽岡 11-3

²⁾ 〒 097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志 利尻町立博物館

Tanacetum vulgare, a New Host Plant of *Coleophora albicans* and *C. argentula* (Lepidoptera, Coleophoridae) from Rishiri Island, Hokkaido, Japan

Yuichi KUSUNOKI¹⁾ and Masahiko SATO²⁾

¹⁾ 11-3, Kaguraoka, Asahikawa, Hokkaido, 078-8321 Japan

²⁾ Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

Abstract. Larvae of two Coleophorid moths, *Coleophora albicans* (Zeller, 1849) and *C. argentula* (Stephens, 1834), were found on *Tanacetum vulgare* in the northern coastal grassland of Rishiri Island, Hokkaido, Japan. The former species fed on the leaves, and the latter fed on the seeds of this plant. *T. vulgare* is considered to be a new host plant of both species.

エゾノヨモギギク (*Tanacetum vulgare* L.) は国内では北海道にのみ分布し、北部・東部沿岸に局部的に分布する稀少植物である (梅沢, 2007)。利尻島においても北部の海岸などごく狭い地域に自生している。筆者の一人佐藤は、エゾノヨモギギクの葉および実を食べる2種のツツミノガ幼虫を発見した。これらの幼虫を楠が飼育して成虫を得た。交尾器を含む検討の結果、これらは下記のように国内から既知のツツミノガに同定されたが、両種ともにエゾノヨモギギクに寄生することは初めての知見であるので、ここに報告する。同定をしていただいた奥俊夫博士に深謝する。

1. ヨモギケブカツツミノガ

Coleophora albicans (Zeller, 1849)

最初にエゾノヨモギギクから本種の幼虫を発見したのは、2009年9月8日で、鴛泊町富士野園地付近の草地で、頭花上を歩行していた1幼虫を佐藤が

発見、採集した。筒巢は長さ約5mm、表面にはエゾノヨモギギクと思われる毛が多数付着していた (図1)。飼育後、この幼虫は9月いっぱいエゾノヨモギギク葉を摂食し、筒巢は6.5mmにまで成長した。しかし、越冬飼育に失敗し、羽化には至らなかった。

2018年9月14日および30日、富士野園地から西に400mほどの海岸部で、エゾノヨモギギク



図1. 富士野 (2009.ix.8)



図2. 飼育中の幼虫。



図3. ヨモギゲブカツツミノガの羽化成虫とその筒巢。



図4. 富士野 (2018.ix.14)。

葉にいた3頭のほぼ成熟した幼虫(筒巢の長さ約6mm)を再度採集し(図2), 飼育した。幼虫は10月上旬まで摂食し, その後越冬に入った。2019年6月16日に1♀が羽化し, この成虫(図3)から本種と同定できた。

本種は国内では北海道・本州に分布し, オオヨ

モギの葉や実を食べる事が知られているが(奥, 2013), それ以外の寄生植物の報告はなかった。

また, 国外で本種は旧北区に広く分布するが, ヨーロッパでも幼虫は各種のヨモギ属 (*Artemisia*) の葉や実を食べることが知られている (Emmet *et al.*, 1996)。エゾノヨモギギクも本種のヨーロッパの分布域に広く分布するものの, 本種がこの植物に寄生したという報告を見ない。

なお, 本種が発見されたエゾノヨモギギクの株の周囲には, オオヨモギが重なるように生えていた(図4)。したがって, 母蛾はオオヨモギに産卵し, ここで孵化した幼虫が成長中にエゾノヨモギギクに移動して摂食を続けていた可能性は否定できない。ただし, これまでに複数の幼虫がエゾノヨモギギクから見つかっているので, 仮に移動個体であったにしても, 本種はエゾノヨモギギクに一定の嗜好性を持っているものと推測される。



図5. ノコギリソウツツミノガの筒巢。



図6. 富士野 (2009.x.7)。



図7. ノコギリソウツツミノガの羽化成虫とその筒巢.



図8. ノコギリソウツツミノガの筒巢.

2. ノコギリソウツツミノガ

Coleophora argentula (Stephens, 1834)

エゾノヨモギギクから本種の幼虫を発見したのは2009年9月26日で、約10頭の幼虫の筒巢が実上に付いていた。採集地点は富士野園地から西に400mほどの海岸部の草地であった。実上の筒巢は長さ5-6mm、褐色の細粒で覆われていた(図5)。その後10月7日にも約20頭を採集し(図6)、これらを加えて飼育した。幼虫は10月前半まで実上で摂食を続け、その後越冬、翌2010年7月14日から8月6日までの間に、合計8♂10♀が羽化した。この成虫(図7)から本種と同定した。

なお、本種はノコギリソウの実に産卵された場合、若い幼虫は実内部にトンネル状の空間を作って摂食し、ほぼ成熟してから実の表面に糸を吐いて周囲の顆粒などをまとめて筒巢を作る習性がある(楠・奥, 2010)。今回のエゾノヨモギギクの場合も、飼育中に新たに1個、実上に筒巢が形成されてきたことを観察した(図8:中央付近の筒巢)。従って、エゾノヨモギギク実に寄生した場合でも、ノコギリソウと同様の成長過程をとっているものと思われる。また、こうした習性から幼虫が筒巢形成前に植物間を移動することはまず考えられないので、本種の場合、母蛾は間違いなくエゾノヨモギギクに産卵したものと推測される。

本種は国内では北海道・本州北部に分布し、在来種のノコギリソウおよび帰化植物のセイヨウノコギ

リソウの実を食べる事が知られているが(楠・奥, 2010; 奥, 2013)、それ以外の寄生植物の報告はなかった。なお、採集地周辺のノコギリソウからも本種の幼虫は確認されている(楠・奥, 2010)。

また、国外では本種も旧北区に広く分布しているが、ヨーロッパでもセイヨウノコギリソウなどノコギリソウ属(*Achillea*)に固有の種であることが知られている(Emmet *et al.*, 1996)。前種同様、本種がエゾノヨモギギクの実を食べたという報告は見つからなかった。なお、ヨーロッパでは*C. tanacetii* (Mühlig, 1865)という近縁の別種が、エゾノヨモギギク実に寄生する事が知られている(Emmet *et al.*, 1996)。

参考文献

- Emmet, A. M., J. R. Langmaid, K. P. Bland, M. F. V. Corley & J. Razowski, 1996. Coleophoridae. In Emmet, A. M. (ed.), *The moths and butterflies of Great Britain and Ireland*, 3: 126-338, pls. 1-8, 12-16. Harley Books, Colchester, England.
- 楠祐一・奥俊夫, 2010. 北日本産ツツミノガの分布記録と生態(2). 誘蛾燈, 201: 121-133.
- 奥俊夫, 2013. ツツミノガ科. 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑3: 231-245. 学研教育出版, 東京.
- 海沢俊, 2007. 新北海道の花. 北海道大学出版会, 札幌. 462pp.